

# 命の教訓 大川小から次世代へ 卒業生たちの取り組み

〈宮城〉 (22/09/02 19:02)

## 東日本大震災特別企画「ともに」。

津波で児童や教職員、あわせて84人が犠牲となった、宮城県石巻市の大川小学校で命の教訓を次の世代につなげていこうと、卒業生など、若い人たちが地域のつながりの再生に取り組んでいます。東日本大震災の発生から12回目のお盆。宮城県石巻市の震災遺構・大川小学校で、手づくりの紙灯ろうに明かりを灯す追悼行事が、初めて開かれました。

企画したのは、大川小の卒業生などで作る「Team大川未来を拓くネットワーク」。あの日、津波に飲まれながらも一命を取り留めた只野哲也さん(23)が代表を務めています。震災直後からメディアの取材に応え続けてきた只野さん。

只野哲也さん(当時11歳)「全国のみんなに東北が、これほど被害を受けたので知ってほしい」語り部にも取り組んできましたが、注目され続けることに疲れを感じるようになっていました。

只野哲也さん「世に顔を出し続ける大変さをまざまざとこの10年で知って、“大川小の只野哲也”で居続けるのは勘弁してほしい」去年8月、只野さんに転機が訪れます。広島原爆ドームを見学し、戦争を伝え続ける語り部の男性と交流しました。被爆2世ガイド平原敦志さん「思いはだんだん薄れる。薄れるのはなぜか、我が事ではないから。私が我が事というのは、いまだにおじを探している。伝承・ガイドする人の心得、本気でやらないと」只野哲也さん「伝承にはある程度の覚悟を持って臨まなければいけないと改めて思ったし、それができるのって“大川だと誰なんだろう”って思ったときに、自分がやらなければいけないと思う」当事者が持つ、言葉の重み。只野さんはその後、同級生たちと、「Team大川未来を拓くネットワーク」を立ち上げました。



Team大川未来を拓くネットワーク 只野哲也さん「よりよい未来を拓くために、人と人をつなぐネットワークを、私たちなりに築いていきたい」団体の活動を通じて、全国で防災に関する講話や意見交換を行ってきました。そうした交流の中で、新たな思いが芽生えたといいます。

Team大川未来を拓くネットワーク 只野哲也さん「若者がいない状況で何かをやろうとしても限界があるのかなとすごく感じて、ただ“若者がいなくなる”って嘆くのではなくて、自分たちが対策して強制ではなくてみんなが来たいと思えるものを作り上げていきたいなど」「世界中で人の命を一番に考えることを願い献灯します」今年3月11日、大川小の前で、竹灯ろうをともす行事が開かれました。遺族だけでなく、さまざまな人に関わってもらい、それぞれの立場から犠牲者を悼み、未来へ思いをはせる。ここからヒントを得て、只野さんたちが企画したのが、「おかえりプロジェクト」です。

震災当時在籍していた児童の人数と同じ108個の紙灯ろうを、校舎の中庭に並べました。亡くなった命だけでなく、今を生きる命も「おかえり」と迎えられるように。そんな思いを込めた配置にしました。そして、準備が一段落して行われたのは…。「取り残されている人がいたら、こちらの一次避難場所の校庭に誘導してください」避難誘導訓練です。大川小ではあの日、十分な高さがあった裏山を前にしながら、避難が遅れ84人が犠牲になりました。今回は、その裏山も二次・三次避難場所として想定し、事前にスタッフの間でマニュアルを共有していました。

Team大川未来を拓くネットワーク 只野哲也さん「裁判でも上げれば助かったと証明されているわけなので、だったら俺らもやらないといけないと思う」あの日、の教訓をつなげていく。雨の中、柔らかな光を放つ紙灯ろうは、久しぶりに母校を訪れた卒業生の姿も照らしていました。震災当時、6年生だった浮津天音さん。ここ3年以上、大川小に来ていなかったといいます。

震災当時大川小6年 浮津天音さん「罪悪感みたいなのがあったり悲しいことを思い出してしまったりとか、無理して悲しみに来る場所ではないというのがあったので。ちょっと距離を置いていたところはあった。少し大川から離れていた人も帰って来られる場所になっていて安心した」只野さん自身も、大川小との向き合い方に迷った経験があるからこそ、今回は“きっかけを作る”ことを大切にしました。

Team大川未来を拓くネットワーク 只野哲也さん「大川に“帰ってみたいけど帰りづらいな”って思ってる人がいるのであれば、少しずつ自分たちが帰ってこられるような空間・場所・催しを規模は小さくても展開していく、“よかったら帰ってきて”って感じですよ」大川小から命の教訓を伝える輪を広げ、次の世代へつないでいくために。大川の若者たちが動き出しています。